伊豆半島ジオパーク教育通信

第2号（平成29年9月発行）
発行　伊豆半島ジオパーク推進協議会
ＴＥＬ　0558-72-0520
e-mail　info@izugeopark.org

水理模型を使って川の流れを学習する子どもたち

伊豆っ子防災学習会

伊豆市内のふるさと学級生（小学校4～6年生）25人が、ジオリアなどを会場にした「伊豆っ子防災学習会」に参加しました。この学習会は、伊豆半島の成立ちや地形・地質の特徴、土砂災害に対する防災施設の役割、地震時の対応など、災害から「自分の身は自分で守る」心構えを楽しみながら体験・学習するプログラムです。ジオリアの見学や起震車・災害対策車両の体験のほか、フィールドワークとして湯ヶ島地区の長野川流域の砂防えん堤見学と周辺の地質について勉強しました。

フィールドワークを体験した子どもたちは、模型やスライドを使って学習した伊豆半島の成立ちや砂防えん堤の役割などを実際の現場で目の当たりにして、自然の雄大さを感じるとともに防災の重要性を再確認していました。

（文：沼津河川国道事務所・伊豆市）

授業で使える火山実験・岩石観察を学ぶ

田方地区の小中学校で理科を担当している先生方が、ジオリアで研修会をおこないました。プロジェクションマッピングを使って伊豆半島の成立ちや地形の特色等について説明を受けた後、2班に分かれて火山の噴火実験と岩石や火山灰等の組織の観察方法を学びました。

参加した先生方からは、「ジオリアは初めてでしたが、とてもわくわくしました。私達も生徒がわくわくするような授業を作っていきたい」（中学校）、「自分は理科が専門ではないが、子どもたちに楽しく教える工夫をいくつか知ることができました」（小学校）といった感想が寄せられました。

魅力ある授業づくりには、観察・実験の充実と、実社会・実生活との関連づけが大切です。先生方がジオパークとつながることで、自分達の住む地域の自然に関心をもち、本研修の成果を積極的に授業に活かしていけるようになればと思います。（文：田教研理科部(天城中学校長)日吉）

水槽を使用した噴火実験を観察する参加者

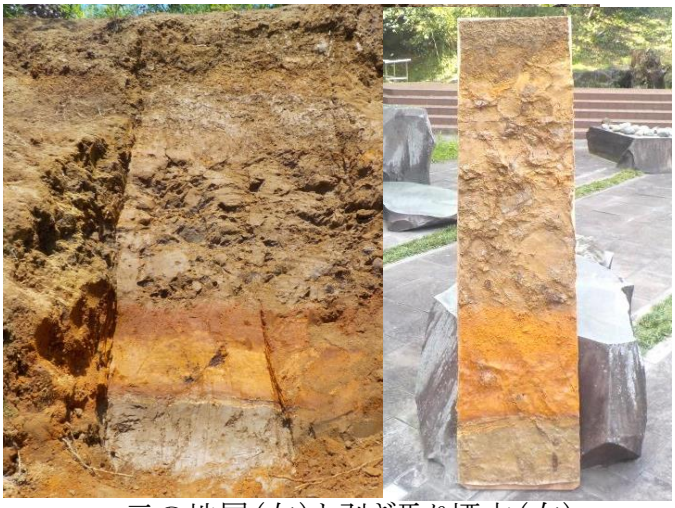
了仙寺にて審査員と

世界ジオパーク審査でも子ども達が活躍

7月25日から28日にかけて行われた、ユネスコ世界ジオパーク認定に向けた現地審査で児童・生徒が発表を行うなど活躍しました。

下田の街並み歩きでは、さいとうスクールに所属する下田小学校の4年生4名、3年生2名が、校歌を歌って審査員を出迎えた後、街並み歩きに同行。下田富士と富士山の逸話を紹介したり、伊豆石が身近にあることやその形成過程を手作りのフリップを使用して発表したりしました。

西伊豆町一色の枕状溶岩では、松崎高校サイエンス部の生徒が枕状溶岩の形成される過程を紙芝居風に説明したほか、再現実験に取組む様子を発表し、審査員から室温と高温下では違いが出るのではといったアドバイスをもらっていました。



元の地層（左）と剥ぎ取り標本（右）

地層の剥ぎ取り標本作成

教育通信第1号でお知らせした、伊豆の国市内での地層の剥ぎ取り標本ですが、7月に作業を行い現地より剥ぎ取りを実施しました。

作業としては、まず、乾燥したり草のはえている表面を削りながら平らな面を作っていきます。標本を作りたい場所がきれいになったら専用の接着材「トマックNS－10」を地層に塗り、補強用の布を貼って接着、乾燥を待ちます。接着後、布の周囲に切込みを入れながら引き剥がすと、地層からの剥ぎ取りが完了します。 その後は、不要部分のカットや保護塗料を塗って完成となります。

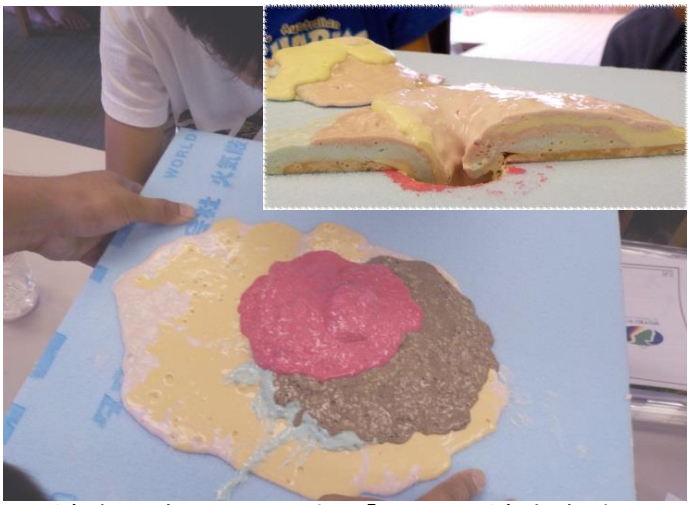
授業の様子は次号でお知らせできると思います。子供達がどのような反応をしてくれるか楽しみです。

ジオリアで夏休みイベントを開催

ジオリアでは、夏休み自由研究の手助けになればと「キッチン火山」と「石ころ標本づくり」のワークショップを開催しました。

キッチン火山では、台所にある身近な材料を使用して火山噴火の謎にせまりました。噴火実験では楽しみながら、弁当パックの蓋を使用した立体模型作りでは真剣に取り組みながら学んでいました。

石ころ標本づくりでは、形成過程の異なる2種類の石の標本づくりに挑戦しました。石ができる過程を学んだあと、石を薄く磨いていく行程にチャレンジしました。思うように磨けず悪戦苦闘する子もいましたが、完成した標本を顕微鏡で観察すると綺麗な結晶が浮かび上がり歓声がわいていました。



溶岩の流出を再現する「カラフル溶岩実験」

学習指導要領の改訂に対応して

学習指導要領が改訂され、小学校では平成31年度、中学校でも平成32年度から新しい学習指導要領での授業が開始されます。今回の改訂において大きな柱となるのが、自ら学び考える力を育み持続可能な社会の担い手となる教育です。

伊豆半島ジオパークでは、新しい学習指導要領に対応できるよう、人々と大地のつながり、産業や観光での大地との関係など、身近な場所から自分達の生活と大地の関わり方を学べるよう準備を進めています。子ども達が、自分の住んでいる地域の成立ちや、その地に根付いた風習や産業を理解することは、この伊豆地域が持続可能な地域となる第一のステップではないかと思います。

8月24日（木）には、ESD国際化ふじのくにコンソーシアムと共催で教職員向けの研修会を開催しました。研修会では、参加者同士が意見を出し合い、文豪の多くが訪れた地ということで「文学」という観点から、狩野川が鮎友釣りの発祥の地であることから「鮎」、西瓜の陰に隠れながら栽培されていた「落花生」を3つのテーマとしたジオや生活・観光・環境問題等との関わりを考える学習課題が提案されました。このような問題について、子どもたちが調べたり考えたりする中で、地域の良さや問題点、人・コト・モノのつながりに気づき、地域のことを学んでいくのではないかと思います。

編集後記

教育通信の第2号となる今回は、夏休み期間ということもあり学校現場での取組みを紹介できませんでした。次号からは、再び学校での取組みを紹介できると思います。

さて、教育通信のネーミングですが、少しかたいイメージになってしまいました。というわけで、愛称・ネーミングを募集したいと思います。親しみがわくようなもの、ユニークなものなど様々な愛称を募集しますので、事務局までメールにてご連絡頂くようお願いします。（事務局　松永）